

アガサ・クリステイについて
—スタイルズ荘の怪事件を中心に—

目次

序章 アガサ・クリスティと私

第1章 クリスティの生涯

- (1) 幼少期
- (2) 青年期
- (3) 壮年期
- (4) 晩年

第2章 クリスティの生きた時代

- (1) 第一次世界大戦とクリスティ
- (2) 「スタイルズ荘の怪事件」とその時代

第3章 クリスティと毒物

- (1) 「スタイルズ荘の怪事件」と毒物
- (2) ストリキニーネについて

まとめ

謝辞

参考文献

序章 アガサ・クリスティと私

「アガサ・クリスティと私」というと、なんだかとても大げさな気がする。

しかし、今回の研究の動機となったのは確かに「クリスティと私」の間にかなり親しい関係があったからである。（私からみた、かなり一方的なものではあるが...）小さい頃から母親の影響でミステリーを読むようになり、中でもそのトリック・犯行の動機の面白さで群を抜いていたのがクリスティの作品であった。この人間科学研究のクラスで「アガサ・クリスティについて」やろうと思ったのも、彼女の作品の魅力について自分なりのアプローチをしたかったからだ。

第1章 クリスティの生涯

クリスティが遺した数々のミステリー。その中には彼女が成育してきた環境・その過程で感じたことがさりげなく織り込まれ、物語の重要な伏線となっていることが少なくない。以下に彼女の生涯を四期に分けて検討してみたい。

（1）幼少期

彼女の父親、フレデリック・アルヴァ・ミラーと母親、クララ・ベーマーは義理の従兄妹同士であった。というのも、クララの父親はアーガイル・スコットランド高地連隊の将校であったのだが、落馬が原因で若くして死亡。27歳で未亡人となったクララの母親に、裕福な米国人の後妻となっていた彼女の姉から子どもを養子として引き取りたいという申し出があった。その時、伯母に養子として引き取られていったのがクララなのである。そして、伯母の義理の息子がフレデリックであったのだ。当時、米国に住んでいたフレデリックは英国に来る度にクララに会うこととなる。そして、10年後に二人は結婚することになるのだ。フレデリックとクララの二人は英国西南部の港町トーキーで新生活を始めた。当時、この地は冬期の保養地として有名であり、海が好きだったフレデリックは特に気に入っていた。しかし、長女のマージョリーがここで生まれた時、フレデリックは米国に住む自分の祖父母にマージョリーを会わせる為に米国にむけ、英国をでた。彼は自分を育ててくれた祖父母を大変愛していたので、そのまま米国に永住するつもりであった。けれども、長男のモンタントが生まれると、米国を離れ英国に戻る事となる。そして、次女であるアガサは英国トーキーのトア・モハンで生まれたのだ。アガサの生まれた家はトーキーでも上流家庭の住んでいる地区ではなく、野原のある田舎へ通じる道沿いにあった。この自然に恵まれた環境の中でアガサは様々なことを経験したのであろう。後に彼女が書いた小説にはこの原風景を感じさせる場面が少なくない。

この時代、先祖から代々、財産を受け継いでいる家や、親や肉親から遺産を残された人々は、その受け継いだもので安楽に暮らしていくことが出来ていたので、働くことはしていなかった。アガサの家庭も裕福とはいえないが、それに近い生活をしていただ。父親のフレデリックは毎朝クラブに出掛け、昼食を自宅で取ると、再びクラブに戻りホイストと呼ばれる四人で行うトランプ遊びに興じていた。さらにシーズン中はクリケットクラブの会長としてクリケットもやっていた。このように、自らお金を得る為に行動するという意識も才能も乏しい人物であったようだ。

アガサが生まれた時、既に姉マッジは11歳、兄モンティーは10歳になっており、家

を出て寄宿学校で生活していた。つまり、アガサは三人兄弟の末っ子として生まれながら、ほとんど一人っ子のような状態で幼少期をすごしていたのだ。さらに階級制度が厳然と残っている英国では、両親と子どもが濃密な時間を共有することは少ない。乳幼児はほとんどの時間を“ばあや”と共に過ごすことが普通であった。そのため子どもは成長する過程において、母親ではなく“ばあや”の影響を大きく受ける。アガサもその例外ではない。母親のクララは「子どもは8歳になるまでは字を読ませてはいけない。そうすることが目のためにも頭のためにも良いのだ」（『アガサ・クリスティ自伝』上、p.47）という考えの持ち主であった。けれどもアガサは5歳前には一冊の本を読めるようになっていたのだ。それはなぜか？ここに彼女の“ばあや”が深くかかわっている。“ばあや”は教会には行かないものの家で聖書を読んでいた。幼いアガサは、この“ばあや”から聖書や他の様々な物語を読んでもらううちに、自然に文字を覚えたのだ。このことを“ばあや”から聞いたクララは非常に困ってしまったが、フレデリックは読めるのであれば、書く事、さらに算数も習ったほうが良いと言い出し、自ら毎朝食後にアガサに教えるようになった。

幼いアガサは学校に行かず、さらに一人っ子に近い状態で生活していたためか、ひどく内気で夢みがちであり、また“ばあや”の話す貴族階級に強い憧れを抱いていた。ある日、「大人になったらレディ・アガサになるの」（『アガサ・クリスティ自伝』上、p.84）と無邪気の言うアガサに“ばあや”は現実を教える。「レディ・アガサになるにはレディとして生まれる必要があります。つまり公爵・侯爵、または伯爵の娘でなくてはレディにはなれないのです。確かに、あなたが公爵と結婚すれば公爵夫人にはなれます。しかし、それは生まれながらのレディとは違うものです。」（『アガサ・クリスティ自伝』上、p.84）このときアガサは初めて、世の中には努力してもなれないものがあるということを知ったのである。

アガサが6歳になった頃、父親のフレデリックが心臓病を患い、一家はトーキーの自宅を人に貸し、南仏に半年間滞在する。これは療養のため、というよりは生活のためであった。当時は英国で暮らすよりも、仏国で暮らすほうが経済的であったのだ。この頃アガサに多大な影響を与えた“ばあや”は隠退し、仏語を話す家庭教師がつけられた。帰国後はピアノも習うようになるが、11歳の時、フレデリックは亡くなる。

フレデリックが心臓病で倒れた頃からすでに、彼が受け継いでいた財産は投機を任せていた人物によって大幅に減少していたので、未亡人となったクララは3人の子どもの将来と生活の維持といった経済的な問題に頭を悩ますようになる。既に社交界にデビューしていた姉、マッジはフレデリックの亡くなった翌年、クララの幼なじみの息子と結婚することとなった。このマッジは結婚前から小説を書いており、結婚後10年か15年たってからは舞台劇を書くようになった。彼女の書いた舞台劇は王立劇場で上演されるほどであった。彼女自身もアマチュア俳優として舞台に立ったこともある。このように豊かな才能をもつマッジを認めていたクララはもう一人の娘、アガサにも小説を書くように勧める。

既に8歳の時、姉のマッジはアガサにホームズの物語を手ほどきしてくれおり、それからアガサはルパンなどの探偵小説に夢中になる。「ぜひ探偵小説を書いてみたい」（『アガサ・クリスティ自伝』上、p.392）というアガサにマッジは「あなたには無理。できっこないわ。賭けてもいい」（『アガサ・クリスティ自伝』上、p.392）とまで言っていた。このとき、アガサの頭の中に「いつかは探偵小説を書いてみよう」という想いが芽生えていたのではないだろうか。

このように母の勧めがなくとも、姉であるマッジの活躍は後にアガサを創作活動にむかわ

せる一種の起爆剤となったようである。だが、アガサがその頃考えていたのは幸せな結婚をすることであった。幼い頃から夢みがちであったアガサにとって最高の幸せとは、父と母がそうであったように、死が二人を分かち時までお互いを信頼し、寄り添いあって暮らすこと、であったのだ。

アガサと母が選んだ寄宿学校で、彼女は以前から知人に習っていたピアノに加え、声楽も始めた。これにより、一時は音楽家になろうとまで考えるのだが、プロとしての才能はないと指摘され、諦めることとなる。

(2) 青年期

22歳で英国航空隊所属のアーチボルト・クリスティと出会い、文字どおり電撃的な恋に落ちたアガサは既にいた婚約者との婚約を解消することとなる。そして1年半後、第一次世界大戦開戦直後の12月、クリスマス休暇中に二人だけで式を挙げ、二人は結婚した。夫となったアーチーは式の直後、慌ただしく仏国に参戦していった。

アガサは結婚前から、ボランティアの看護隊員として病院に勤務していた。彼女が悪性のインフルエンザにかかり、休んでいる間に病院に薬局が設けられた。復帰してきたアガサはそこに配属され、2年間働くこととなった。そこでは助手として働きながら、軍医や軍所属の薬剤師に調剤ができるよう、薬剤試験の勉強をする必要があった。常に忙しい看護の仕事と違い、調剤の仕事は忙しいばかりではなく、暇なときもあった。薬局を出て行かない限りは、何をやっても自由であった。この時、アガサはいつかの想いを思い出す。「**そうだ。探偵小説を書いてみよう。**」(『アガサ・クリスティ自伝』上、p.470) 一体、自分にどんな探偵小説が書けるのか、思案にふける彼女の周りには薬剤があふれていた。死に至らしめる方法として、毒殺を多用するようになっていくのは必然のことだったのではないだろうか。

26歳で一編の探偵小説を書き上げたアガサは、それをある出版社に送る。しかし、その原稿は返送されてしまう。けれどアガサは諦めず、返送されても違う出版社に何度も原稿を送りつづけていた。だが、夫のアーチーが休暇をとって帰国してきたことで、原稿のことをすっかり忘れてしまう。戦争は続いていたのだが、アーチーは空軍省のロンドン配属となり帰国してきた。アーチーの帰国によって、アガサは4年に及ぶ病院勤務から離れることとなる。

ロンドンで暮らすようになったアガサの生活は一変した。29歳で長女、ロザリンドを出産したことで生活はさらに変化する。この変化の中でアガサが処女原稿について思い出すことはほとんどなかったであろう。だが、事態は急変するのだ。アガサが30歳になった頃、忘れていた処女原稿『スタイルズ荘の怪事件』について出版社から連絡がきた。原稿を出版してくれるというのだ。この時の彼女は一体どんな気持ちであったのだろうか？自分が幼い頃から憧れていた幸せな生活を送っている今、過去に姉の挑戦を受けて書いた原稿が出版されるというのだ。まさに幸せの絶頂だったのではないだろうか。

こうして、ミステリーの女王の処女作『スタイルズ荘の怪事件』は日の目を見、無名の作家の探偵小説としては異例の2000部を売上げた。続いて、『秘密機関』、『ゴルフ場殺人事件』が出版され、いずれも上々の売れ行きであった。

アガサが33歳になった時、夫アーチーに大英帝国博覧会の宣伝使節の仕事が舞い込む。これを受けたアーチーと共にアガサは幼い娘、ロザリンドを母に預け、世界一周旅行に旅立つ。南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランド、ハワイ、カナダ、米国...

と諸外国を歴訪し、帰国した時、夫のアーチャーは失職していた。

アーチャーが失職しているため、収入を得るためにアガサは『ミル・ハウスの怪事件』を書き上げる。出版社に持っていったところ連載権として500ポンドが提示された。これは後に『茶色い服の男』と改題して出版されることとなる。やがてアーチャーにも仕事が見つかったので、アガサは田舎の小住宅を手に入れる。トーキーの小さな家で仲睦まじく暮らしていた自身の両親と同じような暮らしを始めるためであった。だが“スタイルズ荘”と名づけたこの家でアーチャーはゴルフに熱中しはじめ、アガサはいわゆるゴルフ未亡人となる。ずっと憧れていた両親と同じような暮らしをするために手に入れた家で、毎日毎日ゴルフにいそしみ、自分のことをほとんど振り返らなくなったアーチャーをアガサはどう思っていたのだろうか。

二人が住むようになった“スタイルズ荘”では過去二代に渡って持ち主が不幸になっていた。その例に漏れず、三代目の住人となったアガサにも不幸が襲いかかったのだ。36歳になっていたアガサは、その年、最愛の母、クララを亡くすと同時に夢に描いていた幸せな家庭をも失うこととなった。アーチャーがゴルフを通じて知り合った女性と恋愛関係となり、アガサに離婚を求めてきたからだ。大きなショックに襲われたアガサは“スタイルズ荘”から姿を消す。既に売れっ子作家になりつつあった彼女の失踪をマスコミは大々的に取り上げた。警察では夫がアガサを殺したのではないかと疑い、大規模な捜索が行われた。

11日後、保養地で発見されたアガサはその11日間のことを全く思い出せなかった。医師は一時的な記憶喪失と診断。一方、マスコミは売名の為の自作自演だと非難した。このことはアガサを一層苦しめ、彼女は大のマスコミ嫌いとなっていた。アガサ本人の書いた自伝にもこの事件は書かれておらず、真相は今も闇の中である。38歳でようやく離婚を受け入れることのできたアガサは娘のロザリンドとの生活を維持するために、次々と作品を生み出していく。

(3) 壮年期

40歳になってメソポタミアを旅行したアガサは旅の途中、考古学の権威であるウーリー卿の紹介で26歳の若い考古学者、マックス・マローワンと出会う。この頃のアガサは毎年一編の長編を書き、同時に何本かの短編も書けるほどに作家として安定していた。また米国でアガサの作品が連載物となりはじめ、英国よりも莫大な収入を彼女にもたらしていた。やがて親しくなったマックスから求婚されたアガサは、それを受け入れ、極秘に式を挙げる。結婚後もマックスは中東で発掘の仕事を受け、アガサはそれに同行しイラク、シリアを訪れるようになる。この時、利用したりしていた“オリエント急行”から、アガサが44歳の時、代表作の一つといわれる『オリエント急行殺人事件』が生まれる。

49歳の時、第二次世界大戦が勃発。アガサは再び、薬剤師の仕事につくことになる。

53歳の時、自分の死後のことを考え、ポアロ最後の事件『カーテン』、ミス・マーブル最後の事件『スリーピング・マーダー』を完成させる。

(4) 晩年

62歳になったアガサはメアリ皇太后80歳の誕生日記念に創作したラジオ寸劇(BBC放送で放送された)『三匹の盲目のねずみ』を舞台化。『ねずみとり』と改題されたこの作品は、ロンドンのアンバサダー劇場で初演され、以来、24年間、世界最長のロングラン

興行となる。

アガサが66歳となった1956年、新年恒例の叙勲リストに彼女の名があった。CBE (Commander of British Empire : 三等勲爵士)の称号が与えられたのである。マックスが考古学における業績によりナイト爵位を与えられたのは、アガサが78歳のときであった。78歳にして、彼女は幼い頃、夢見た“レディ・マローワン”となったのである。そして彼女自身も、81歳でナイトに相当するDBE (Dame Commander of British Empire)を与えられる。

ミステリーのみならず、詩作・エッセイなどの様々な創作活動を続けていたアガサであったが1976年、85歳でマックスに見守られつつ、息を引き取った。

互いに信頼し、愛し合っていた両親の姿を理想として成長し、何よりも妻となり、母となり、田舎の小さな家でガーデニングを楽しみながら静かに暮らすのが彼女の夢であった。だが、アガサ自身の作品にも幾度となく登場する“運命”の力により、彼女の人生は自身の夢とはかけ離れたものとなった。けれど、それを彼女自身は後悔していなかったようである。

(注) この章は『アガサ・クリスティ自伝』上、下巻を参考にした。

第2章 クリスティの生きた時代

クリスティは二度の世界大戦を経験している。いわゆる激動の時代を生きたのだ。そして、激動の時代であったからこそ、彼女は特殊な職に就くことになる。この職業が彼女のその後の人生に大きな影響を与えたのは、まぎれもない事実である。

(1) 第一次世界大戦とクリスティ

1913年から1914年にかけて、英国では応急手当や家庭看護法の教室が盛んに開かれていた。参加者たちは互いに手足や頭部に包帯を巻く訓練をし、テキストを用いた講義後、試験に合格すると一週間のうち二日間、地方病院で外来患者の看護に携わることが認められていた。しかし、正規の看護婦ではないため、病院内での扱いは必ずしも良いとは言えないものであった。けれど、アガサは不当な扱いを受けても、看護の仕事に喜びを見出し、病院での仕事のみならず、地区看護師の手伝いもしていた。

1914年、第一次世界大戦が勃発。前述のように、この年に電撃的な恋に落ちた相手アーチボルト・クリスティとアガサは、慌ただしく式を挙げる。夫となったアーチャーが参戦している間、アガサはトーキーの篤志看護隊で看護助手として働いていた。悪性のインフルエンザで一時は休職していたが、復職後は薬局で働いている。当時の赤十字の記録から、アガサはこの時、通算3400時間も勤務していたことが分かる。

後に彼女は自伝で当時のことを振り返って、こう述べている。「私は看護が楽しかった。私は看護の仕事は楽に馴染むことができ、誰でも従事することのできる、報いられることの多い職業だと思ったし、また今でもそう思っている。もし私が結婚しなかったら、戦争

後に病院看護婦となるための訓練を受けていたと思う。祖父の最初の妻、つまり、私にとっての米国人の祖母は、病院看護婦であったので彼女からの遺伝かもしれない。」(『アガサ・クリスティ自伝』上、p.425) アガサの自伝に病院内組織のことが書かれているが、篤志看護師隊所属であったためか、外部からの冷静なまなざしで描いていて興味深い。

「看護の世界に入ったら、世間的な身分・地位による考えを訂正し、新たに病院組織内での自分の位置を正確に把握しなくてはならない。医師は常にその上位に位置している。『はい、看護婦、先生の手をタオル！』私は、ぱっと人間タオルかけになる。しかし医師は手を洗い、その手を拭いたタオルを私には返されない。なんとも横柄に床に投げ出されるタオルを、大人しく拾い上げることを私は間もなく覚えた。看護婦達の間では人並み以下と軽蔑されているこの医師でさえも、一度病室に入ると何やら高等人間にふさわしいような尊敬を受けるのである。医師に向かって直接話し掛けるなどというのは、無礼なことであり、たとえ親しい友人であってもやってはならないことなのであった。

あるとき、医師がいらいらしてこう怒鳴った。『看護婦！ 僕が必要なのはそれじゃない！』私の持つ盆の上に、彼が必要とする器具があったので、それを差し出した。すると、後で主任看護婦はこういって私をなじったのだ。『もういい加減に心得ているとばかり思っていたのに。なんてでしゃばりなことをしてくれたの。先生が要求されているものを、たとえあなたが持っていたとしても、直接それを先生に渡してはいけないの。まず、私に渡しなさい。私がそれを先生にお渡しするのだから。』私は、これからそうします、と確約した。このようなこともあったが、時がたつにつれて、次第に責任ある仕事をまかされるようになっていった。医師や看護婦の日頃の手順、暗黙のルールにも慣れた。」(『アガサ・クリスティ自伝』上、p.427)

やがて、アガサはこのやりがいのある看護の職をはなれ、薬局へ配属されることとなる。配属された薬局では単なる助手ではなく、調剤を行うために薬剤師試験を受験することが求められた。しかし勤務時間も看護の仕事よりはずっと楽だったし、自宅での仕事との関係も良かった。だがアガサは後に、こう振り返っている。「調剤の仕事は、一時はおもしろかったが、やがて単調になった。私は看護婦に適した天性を持っていたし、病院看護婦をしていたほうが幸せであった。」(『アガサ・クリスティ自伝』上、p.458)

けれど、この単調な仕事についていたからこそ、後のミステリーの女王は誕生したのだ。アガサを常に取り囲んでいた薬品の瓶たちが、彼女を新しい世界へと導いたのだ。

(2) 『スタイルズ荘の怪事件』とその時代

「まわりを毒薬で囲まれているのだから、毒殺を選ぶのが私にとって最も自然だろう。毒殺されるのは誰にしようか？ その人物を毒殺するのは誰か？ いつ、どこで、何のために？ その他いろいろと考えなくてはならない。その殺し方の特殊さから、どうしても親密な間柄の殺人にしなくてはなるまい。いうなれば、すべてある家庭内のことにすべきであろう。そして、そこには当然探偵がいなくてはならない。私はそのころシャーロック・ホームズの小説に夢中であつたが、**私の探偵**を生み出さなくてはなるまい。シャーロック・ホームズに私が張り合えるものでもない。どういう人物に

したら良いだろうか？ 学生？ ちょっと難題だ。科学者は？... 一体、私が科学者なるものをどれほど知っているのか。そこで私はベルギーからの亡命者を思い出した。トアの教区に相当な数のベルギーからの亡命者が住んでいたのだ。亡命警察官はどうだろう？ 隠退した警察官だ。あまり若くなく、非常に几帳面で小男。いつも、ものを整理している。非常に頭が良くなくてはなるまい。灰色の小さな脳細胞がなくて... 灰色の小さな脳細胞。これはいい文句だ。」(『アガサ・クリスティ自伝』上、pp.470-474)

物語の構想を練るとき、アガサは常に放心状態になってしまっていた。心配した母のクララが、どうしたのかと尋ねてきたので、アガサは探偵小説を考えていることを打ち明けた。クララは自分の子供たちは何でもできるという信条をもっていたので、こうアガサを励ましたのだ。「それはいい気分転換になるに違いないわ。本当に最後までそれを書くつもりならば、休暇を取ってどこかへ行って書きなさい。」(『アガサ・クリスティ自伝』上、p.476)

この言葉に勇気を得たアガサは二週間の休暇を取り、ダートムアのホテルで物語を完成させたのだ。

こうして生まれた『スタイルズ荘の怪事件』は何社もの出版社から返送される。だがアガサ自身はその存在を忘れかけていた頃、ボドリー・ヘッド社から2年ぶりに原稿の返事がきたのである。出版社の意向を受け、結末部分が改訂され、出版されることとなった。

物語はまさに当時の時代を映している。

第一次世界大戦で負傷したヘイスティングズ大尉が旧友ジョン・カヴェンディッシュの招待を受け、スタイルズ荘という屋敷に向かうところから、この物語は始まる。当時、大きな屋敷には「名称」がつけられており、人々も普段からその「名称」を用いていた。そして、その大きな屋敷には血のつながりのない知人・友人と一緒に暮らしていることも多かった。そのつてを頼って泊まりに来る客もあったようだ。階級制度が厳然と存在しており、家事をする者、庭の手入れをする者、そして使用人を取り仕切る執事が、大きな屋敷には必ずいた。弁護士や医者、今とはかなり違って、家族の友人のように家を訪問し、家族間のことを正確に把握していることが少なくなかった。

シンシアという身寄りのない娘が物語に出てくるのだが、彼女はなんと赤十字病院で薬剤師として働いている設定なのである。まるで、アガサの分身のような存在である。

ポアロの登場の仕方も時代に合っていて、自然である。殺害されるイングルソープ夫人が救済活動や慈善事業に熱心であり、ベルギーからの亡命者の受け入れにも力をいれていた。夫人によって、助けられたベルギー人の一人がポアロの友人であったというのだ。イングルソープ夫人は物語の中で何度も口にする。「今は戦時中ですから。無駄に出来るものなど何一つありません」(『スタイルズ荘の怪事件』 p.20) これはまさに当時の人々が口にしていただことであろう。さらに真夜中に犠牲者となったイングルソープ夫人の部屋に向かう人々が手にしているのは、懐中電灯ではなく、蠟燭なのである。

(注) この章は『アガサ・クリスティ自伝』上巻を参考にした。

第3章 クリスティと毒物

クリスティは85歳で亡くなるまでの59年間に渡る執筆活動で、66編の長編、148編の短編を残している。そのうち41編の長編、24編の短編で殺人または自殺の方法として、毒物が用いられている。ミステリーの女王と呼ばれるクリスティが、毒殺の女王という異名を持つ所以である。

(1) 『スタイルズ荘の怪事件』と毒物

『スタイルズ荘の怪事件』で犠牲となるのはイングルソープ夫人である。夫人は医者目の前で激しい発作を起し、手当ての甲斐なく死亡する。その発作の激しさから、自然死ではないと考えた医者が死因を分析。致死量のストリキニーネが検出されたのだ。

この物語の核をなす、ストリキニーネ。アガサはこの毒物を物語中に三度登場させている。亡くなったイングルソープ夫人が常用していた強壯剤の成分としてのストリキニーネ、薬屋が“スタイルズ荘の住人”に売った毒物としてのストリキニーネ、シンシアの勤めていた病院の薬局の棚に保管されていた薬剤として合成される前の塩化ストリキニーネ。この三つのストリキニーネを横糸に、複雑な人間関係が縦糸となり壮大な織物が織り上げられていくのである。

アガサの作品の特徴ともいえるのは、その複雑な人間関係が狭い範囲で描かれていることであろう。狭い範囲の人間関係であるからこそ、事件は一見単純に見える。だが、その裏側にひそんでいる事実を丹念に拾い集め、細心の注意をはらい、先入観を持たずに分析すると、事件は全く異なる様相を呈するのである。まるで、薬として人を癒す力を持つものが、その一方で、毒として人を死に至らしめる力を持っているように…。このストリキニーネに関するトリックは、薬局に勤めていたアガサだからこそ思いついたのだろう。物語の中でこういうくだりがある。

「タドミンスターの赤十字病院の薬局で見つけた調剤の書物からの抜粋を読んでみましょう。

左ノ処方ハ、シバシバ教科書ニ引用サレルモノナリ。

ストリキニーネ・スルファ・・・・・・・・一グレイン
臭素カリ・・・・・・・・六オンス
水・・・・・・・・八オンス
服用時、瓶ヲフリ沈殿物ヲヨク混合セシムルコト。

コノ溶液ハ二、三時間以内ニストリキニーネの大部分ヲ透明結晶状ノ不溶解性臭化物トシテ沈殿セシムル。英国ノ一婦人ハ同混合液ヲ嚥下シテ絶命シタ。沈殿シタ、ストリキニーネハ底ニ集リ、最後ノ一服ヲ服用スル際、ソノホトンド全量ヲ嚥下セシモノナリ！」(『スタイルズ荘の怪事件』 p.268)

これこそがこの事件の真相を握る鍵なのであった。

(2) ストリキニーネについて

ストリキニーネは興奮薬の一種。ホミカの種子より抽出される植物性アルカロイド。白色の結晶で水溶性。苦味がある。もともとは熱帯地方で矢毒として使用されていた。反射機能亢進、延髄・大脳皮質興奮作用があるため、かつては強心剤、脚気、消化管障害の治療薬として用いられていたが、現在は使用されていない。過量に服用すると、頭を後方へそらせ、手を震わせ、体を弓のように曲げるなどの激しい発作を起し、死に至る。これと同じような発作はヒステリーや破傷風症にも見られる。また、このストリキニーネの中毒症状は動物だけでなく、植物にもみられる。『スタイルズ荘の怪事件』が生み出された当時、ストリキニーネは一般家庭で頻繁に用いられるものではなかったし、毒物であるがゆえに売買には制限がもうけられていた。だが、薬剤の中に成分として含まれていることは少なくなかったようだ。

薬剤の開発に新時代が訪れたのは、19世紀のドイツからである。生薬から純粋な化合物を最初に単離したのはドイツの科学者であったのだ。1803年に粗製アヘンからモルヒネが抽出される。1820年にはキナの樹皮からキニーネが抽出された。モルヒネは強力な鎮痛剤だが、その前段階のアヘン同様、乱用されることとなる。一方、キニーネはマラリアの予防と治療に大きな功績を残している。

(注) この章は『薬』、『アガサ・クリスティ百科事典』、『スタイルズ荘の怪事件』を参考にした。

まとめ

アガサと私の付き合いは、もう10年以上になる。彼女の作品のほとんどに目を通してははずなのに、今回、改めて読み直してみても印象の変った作品が少なくない。それは、アガサの生涯を追った後に、年代順に作品を読み返したからであろう。幸せな結婚生活に憧れ、一度は手にいれたその幸せを奪われ、それでもまだ夫婦の愛情を信じていたアガサ。彼女は『スタイルズ荘の怪事件』でポアロにこう語らせている。「夫婦の間の愛情は世の中で何よりも大切なものなのです。」(『スタイルズ荘の怪事件』p.288) 一度目の結婚が、夫が愛人を作った末に離婚という結末を迎えた2年後、彼女は再婚する。アガサは、今度こそは、という気持ちだったのではないだろうか。事実、再婚後の1930年代は彼女の執筆活動が最も充実した時期である。

だが、歴史は繰り返される。再婚相手のマックスにも愛人がいたのだ。このことを知ったアガサの哀しみは、苦しみはどれほどだったのだろうか。それでも、彼女は夫婦の愛情を信じていたのだろうか。答えは、イエス、である。彼女は、意識的か無意識かは分からないが自分の作品にそのときどきの自分の気持ちを、さりげなく織り込んでいる。そして、すべてに作品に織り込まれているのは勸善懲悪、キリスト教精神、そして「夫婦の愛情は世の中で何よりも大切なもの」(『スタイルズ荘の怪事件』p.288) だという想いなのである。

アガサの死後ほどなく、マックスは長年の愛人であった女性と再婚する。しかし、再婚後間もなくマックスは亡くなる。マックスの亡骸はアガサの隣に埋葬された。そして、マックスの再婚相手であった女性が亡くなったとき、彼女はアガサとマックスの隣に埋葬し

てほしいとの意向を遺していた。だが、それはアガサ側の遺族の希望により叶うことはなかった。土の下でまでも、夫の愛人と一緒となり、アガサを苦しめられたくないという遺族の想いがあったようだ。どんなに苦しくとも、どんなに哀しくとも、アガサは最期まで夫婦の愛情を信じていたのだから。

ポアロが探偵として整然と事実を積み重ねていく作品であれ、ミス・マープルが揺り椅子で編物をしながら淡々と謎解きをする作品であれ、根底には同じ想いが流れ、全ては『スタイルズ荘の怪事件』のポアロとヘイスティングズ大尉の会話にたどり着く。

「夫婦の間の愛情は世の中でなによりも大切なものなのです」

「あなたのおっしゃることは正しいのでしょうか。そう、世の中でなによりも大切なものですね」(『スタイルズ荘の怪事件』 p.288)。

『スタイルズ荘の怪事件』はアガサの処女作でありながら、トリックやその他の様々な点で、彼女の作品の集大成といえるように、私は思う。

謝辞

今回の研究にあたり長期間に渡って、快くクリスティ作品を貸して下さった友人とそのご両親に最大の謝意を贈ります。そして、毎回毎回、私の拙い発表を温かく聞き、鋭い指摘を与えてくださった先生方、ありがとうございました。また、締め切りを遥かに過ぎていても大目に見て、私の論文が仕上がるのを気長に待って下さっていた相浦先生、ご心配をおかけして申し訳ありませんでした。本当にありがとうございました。

最後に、私にアガサという最高の友人を紹介してくれた母に感謝したいと思います。

参考文献

- アガサ・クリスティ 乾信一郎訳『アガサ・クリスティ自伝』上下 (早川書房、1995年)
モニカ・グリペンベルク 岩坂彰訳『アガサ・クリスティ』(講談社選書メチエ 97、1997年)
ジャレット・ケイド 中村妙子訳『なぜアガサ・クリスティは失踪したのか?』(早川書房、1999年)
H・R・F・キーティング他『アガサ・クリスティ読本』(早川書房、1990年)
深町真理子他訳『アガサ・クリスティ生誕100年記念ブック』(早川書房、1990年)
数藤康雄編『アガサ・クリスティ百科事典』(早川書房、2004年)
アガサ・クリスティ 田村隆一訳『スタイルズ荘の怪事件』(早川ミステリ文庫、1982年)
レスリー・アイヴァーセン 廣中直行訳『薬』(岩波書店、2003年)
マーク・プロトキン 屋代通子訳『メディスン・クエスト 新薬発見のあくなき探究』(築地書館、2002年)
立木鷹志『毒薬の博物誌』(青弓社、1996年)

【コメント】

牛場 彩さんは、アガサ・クリスティーのミステリーの世界をその中で使われる毒物に焦点を当ててみたい、というところから研究を始められました。

素人には 毒物の名前くらい知っていても致死量までは知る由もありません。そのため、なぜクリスティーがそのような薬学の知識をもっていたのかというところに遡る必要が生じ、これまで魅せられていたミステリーの世界から一転して現実の作家の足跡をたどる事になりました。そうして、戦時中、クリスティーが調剤の仕事をしていたことをつきとめます。

また、さらにクリスティー自身がミステリーまがいの失踪をしていたことについてもその背景に彼女の不幸な結婚があることが浮かび上がり、それが作品のところどころにも現れている事を知ります。長年読み込んでこられた作品のようですが、現実とフィクションのはざまから生まれてきた「スタイルズ荘の怪事件」を新たな観点から考察してうまくまとめられました。

今後、他の作品についても別の観点から考察してみられればと願っています。

(相浦玲子)